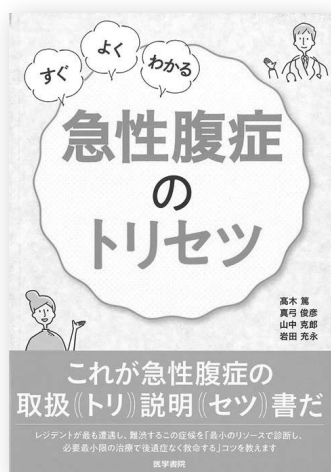




“ドリームチーム”による和製 Cope 本 —若手向け腹痛本の新しいスタンダード—

評者 | 志水太郎 獨協医科大学主任教授・総合診療医学



すぐ・よく・わかる 急性腹症のトリセツ

高木 篤、真弓俊彦、山中克郎、
岩田充永＝編・著

定価：4,180 円(本体 3,800 円＋税 10%)
B5 判・192 頁／医学書院／2020
[ISBN 978-4-260-03945-1]

Cope をはじめ、あまたある腹痛の書籍における本書の位置づけは何か？「すぐ・よく・わかる」「急性腹症」のタイトルにあるように、腹痛診療の名著『Cope's Early Diagnosis of Acute Abdomen』を今時に“超訳”された本（「はじめに」より）と言え、本書の伝えたいメッセージは明確ではないだろうか。Cope は病歴聴取・身体診察の腹痛の標準テキストとして長らく有名であり、評者も学生時代に愛読したが、その輝きは 10 数年たった今も衰えず、腹痛に関する書籍で何を読むべきか、と聞かれたら推薦 3 冊のうちに必ず入る本である。研修医教育などのリファレンスは、結局 Cope 先生の本に戻ることが多い。一方で、Cope が比較的難解であるという欠点(?)は、本書でも指摘されるとおりである。しかし本書は、その欠点を補いつつ、さらに日本の現場感覚を反映した、まさに日本の読者のための“和製 Cope”と言えるつくりとなっている。

本書は実用性が高く、またそのなかに臨床の魂が注入されていると評者は感じる。その理由は、第 1～3 章の順に「Why」「What」「How」で記載された明快な章割りで見てもわかりやすく、現場で求められる頁を迅速に開くことができる実用的なつくりであり、さらに腹部触診や CT 読影の際に体腔内を直観的に頭の中で映像化・想起しやすい具体的なシェーマが多いこと（こういう本がなかなかない!）である。そして、「How」にあたる第 3 章では、小項目のタイトルを読むだけでも腹痛のピットフォールが網羅できるような直言のメッセージにあふれ、速読で全体像を俯瞰することができる、実用性を意識したつくりになっている。特に、この第 3 章は必読である。

これからの医師に必要なのは「どこまで知っているか」よりは、「どう考えればよいか」である。知識をどこまでも広げることは、検索方法さえ心得れば万人が同じスタートラインに立てる。しかし、どう考え、どう行動できるかは、医師個人の生き方・考え方と実地経験の結晶であり、ここに医師のプロとしての expertise や art がある。本書の著者である腹痛診療の達人の先生方のエッセンスを学ぶうえで、この「How」の章は特に外せない。そして、その前を担う第 1・2 章においても、このエッセンスはいきわたっていると感じる。

本書のさらなる魅力として、執筆者の先生方のお人柄を表すかのようなつくりも垣間見える。たとえば、各項目の合間に内挿される“臨床短歌”などはウィットに富み、現場を知る人間にとってはほほえましいものが多い（「してません 絶対絶対してません してませんけど妊反陽性」本書 p.155 など）。

執筆者の先生方は日本の総合救急・外科救急・消化器診療を代表する各先生方であり、まさにドリームチームによる強い絆（4 名の先生方が大学の同級生、また職場の同窓でいらしたことに驚きました）でつくり上げた、後輩のための腹痛学習の総結集、とも言えるだろう。

⑥